

Q

発言の文頭がかぶってしまうのはなぜですか？

私は友達とおしゃべりしているとき、よく同時に話しはじめてしまい、気まずい思いをすることがあります。他の人どうしの会話を聞いていると、あまりそういうことは起きていないようです。私だけどうしてそうなってしまうのでしょうか。

A

札幌学院大学人文学部教授

森 直久 (もり なおひさ)

会話の切れ目だと思って発言を開始したら、相手も同時に話し出していたという現象ですね。会話の切れ目とは、ある人の発言が終わる可能性があるところで、「順番の完了可能点」と言います。ここはまた、話者が変わる可能性のある「移行適切場」になり得ます。ここでは、(a) 話し手が次の話し手を指名してもよい、または (b) 話者が交代してもよい、あるいは (c) 誰も話さなければ話し手は話し続けてよい、という規範に従うよう、私たちは動機づけられています。あなたの問題は (b) と (c) の衝突だと言えましょう。つまり、友達から自分に話者交代しようと話しだしたら友達は話者を継続してしまった、あるいは自分の話を続けようとしたら友達は話者交代してもよいと思っていた、という事態です。

移行適切場は、実のところ、発話以外の行為によってもつくられているのです。たとえば、視線の向け方や姿勢がそうです。グッディン (Goodwin, 1981) は、会話中の話し手と聞き手の視線や姿勢のあり方を記録しました。そこでわかったのは、発話、視線、姿勢を組織的に組み合わせ、話し手と聞き手は互いに「話し手」「聞き手」になり合うということでした。聞き手が視線を外していたり、体の正面を向けていなかったりすると、話し手は言いよどみや有声休止を発する。すると聞き手は呼応するかのようになり、視線と姿勢を話し手に向ける。逆に話し手が視線や姿勢をわずかに外すことによって、話し手の地位を放棄する。そして聞き手が続く話者となる。移行適切場は、音声、視線、姿勢が組み合わさって、しかも個人間で連動してつ

くられているのです (以上のことに関しては、たとえば、山崎・西阪 (1997) を参考にしてください)。

他の人どうしだとあまり起こらないということですので、発話の文頭がかぶるのはあなたに原因がありそうです。あなたは完了可能点で「聞き手であること」「話し手であること」を姿勢と視線によって相手に提示することが、逆に相手が提示している視線と姿勢のあり方を見て取るのがうまくないのですよ。あなたが不用意に変更した視線と姿勢 (相手からは、あなたが話し手であることを放棄しつつあると見えます) に呼応して、相手は体の正面をあなたに向けはじめている (話し手となりつつある) にもかかわらず、それに気づかずあなたは発話を継続した。あるいは、相手が姿勢と視線を変えていない (話し手であることを放棄していない) のに、発話だけで完了可能点だと判断して話しだした。相手の声だけに気をとられたり、話し手を降りる気がないのに、完了可能点で脇のお菓子に視線を移してしまうことのないよう、気をつけてください。

文献

Goodwin, C. (1981) *Conversational organization: interaction between speakers and hearers*. New York: Academic Press.

山崎敬一・西阪仰 (編) (1997) 『語る身体・見る身体』ハーベスト社



Profile — 森 直久

札幌学院大学人文学部教授。専門は認知心理学、社会心理学。主な著書は、『心理学者、裁判と出会う：供述心理学のフィールド』(共著、北大路書房) など。